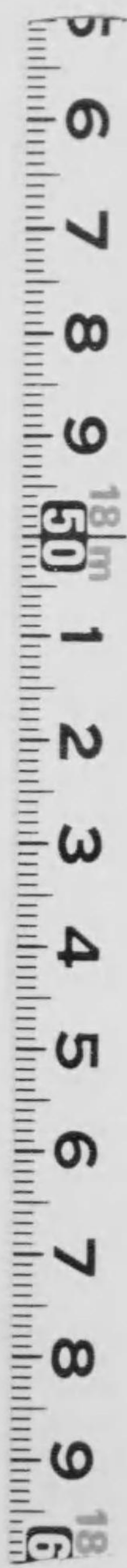


360

106



始



83.4.24

360-106



牛

玄本水記著

大正
4. 6. 15
内交

緒言

我肉體は土より

我靈は神より

少時此世といふ宿屋に逗留して

働きつゝ向上し

向上しつゝ働き

得たるところのものを舉げて

此世といふ宿屋に茶代として置き

彼世に旅立つ時には

緒言

我肉體は土に

我靈は神に歸る

旅は道連れ世は情

逗留中は感謝の外何物もなし

随つて此書元より我失意を託たんとに非ず

また我得意を誇らんとにも非ず

唯己が過去の過失を省みつゝ

聽て牽かれて善光寺へ参りたさに

自らもとめて得たる一匹の牛而已

大正四年春

著者

謗者任汝謗

天公本知我

嗤者任汝嗤

不覺他人知

象

山

功業來
大老
鐵燕外史



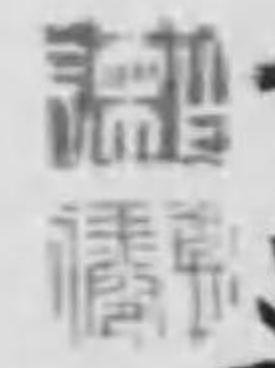
Here on earth we are as soldiers, fighting in a foreign land, that understand not the plan of the campaign, and have no need to understand it; seeing well what is at our hand to be done. Let us do it like soldiers, with submission, with courage, with a heroic joy. Behind us, behind each one of us, lie six thousand years of human effort, human conquest: before us is the boundless Time, with its as yet uncreated and unconquered continents and Eldorados, which we, even we, have to conquer, to create; and from the bosom of Eternity there shine for us celestial guiding stars.

THOMAS CARLYLE.

強惡能故業來



大老
鐵燕外史



Here on
a foreign
the camp
it; seeing
done. Let
mission, w
Behind us
thousand y
before us
yet uncrea
Eldorados,
to create;
there shine

表紙畫は 木嶋櫻谷先生
口繪は 富岡鐵齋先生
挿畫は 谷上景涯君
作歌は 湯淺半月先生
作曲は 米野鹿之助先生

茲に謹んで感謝す

著者

目次

著者の身の上	一
三教師五科目	五
卒業證書	一〇
母の愛	一五
出發點	二二
貧兒の幸福	二五
日米富豪の子弟	二九
労働は神聖なり	三六

目次

孝と成功……………四

故ジェー、ヒー、モーガンの應接振……………四

カーネーギの光風霽月……………五

鐵齋畫伯の詩……………五

コネディカット沿岸の魚釣會……………五

心の快び……………六

奴隸と奴隸……………六

意志の獨立……………七

亡國の兆……………七

三根性……………八

最も有効なる健康法……………八

寺院と動物園……………九

阪神電車の揭示……………九

華嚴の瀧と一粒の米……………一〇

初夢……………一〇

嘘ならざれば通れぬ關所……………一〇

手品師中の手品師……………一四

運動屋……………一六

取締役監査役……………一九

千手觀音……………二二

人と交るの秘訣……………二六

吾輩は教育家なり……………二九

習字と體操……………三二

建築と趣味……………三五

一言一行と人格……………三八

商品の粗製と人間の濫造……………四一

榮螺と鎖國……………四四

別荘と旅行……………四七

京都の蛙と大阪の蛙……………五〇

日米の國交……………五三

品性の揭示場……………六一

此世の宿帳……………六三

晴天三日間……………六六

COWARDカワードの陰口……………六九

十九年間一千万圓……………七一

航海の妙趣……………七四

土と人……………七七

海外發展十二言……………八〇

養子と養家……………八三

三十六ヶ條の内三十五ヶ條……………八六

目次

6

柳の枝の蛙……………一七

失望と感謝……………一六

後醍醐天皇と順徳上皇……………一九

著者の見る神……………二〇

我旅の道づれ……………二〇

目次終

牛

岡本米藏著



著者の身の上

剃りたきは心の中の亂れ髪

頭の髪は兎にも角にも

西國二十五番の札所、清水山の麓、東條川の翠溪

に濱する一寒村に、貧しき、百姓の悴として、産ぶの

著者の身の上

2
聲を擧げてより、十六の春までは、村の小學校に通ふ片閑に、晝は山に刈り、夜は家に、村童を集めて、一小塾を開けり

卒業後、其小學校に、見習として教鞭を執り、只管、師範學校に入るの準備に餘念なかりき

人多き人の中にも人ぞなき

人になれ人ひとになせ人

その頃、余の切なる希望は、人を教ふる教育家たらんと欲するに在りき、そは教育のこそ程、偉大にして、神聖なるものはあらしと、幼な心にも、深く感じたる

が故なり

わけ登る麓の道は多けれと

同じ高嶺の月を見るかな

哇から行くも、田から行くもと、余は老いたる父の爲、母の爲、將た幼き弟の爲、境遇のまにまに、泣く泣く、己れの希望を棄て、端なくも物質界に入れり

破山中賊易 破心中賊難

歐陽明

3
あはれ、朱に交りて赤く、余や竟に俗物と化せんぞとす、さは去り乍ら、山河は改め易く、本性は移し難しとしか

4 や、若き師匠たりし昔の記憶こそ、今の余にこりても、いと懐かしき極みなれ

著者の、筆を手にする柄に非ざるは元より、十露盤弾くに急がはしき身の、烏滸がましくも、何の因果か、今年の元旦に、後前の分別もなく、想ひ付きてよ、月を閲する未だ月餘ならず、南船北馬、席の暖まり、暇さへなきに、少閑を偷みて、爰に脱したるこの稿の、如何に杜撰にして、如何に不親切なるやは、いはずもがな、破鍋に綴蓋、さながら著者の日常もかくこそ

ふまれても根づよくしのべ道芝の

やがて花さく春は來ぬべし

三教師五科目

5 英國の經濟學者ジョン スチュアート ミルは、「格言は千古を通じて不易なり」といひ、近世哲學の泰斗ロドベークンは、「格言中に含める刃物を以て、人事の

6
あらゆる難關を切り開け」を教へ、ロードベーコンの最も崇敬したる、羅馬の哲學者シセロは、「格言中より鹽を探りて、己れの欲する所に、之を撒き散らせ」を誨へたり

凡そ世の中に、格言ほど、噛みしむればしむるほど、味の出づるものはなかるべし、就中、「宇宙は大學校なり」の格言に至りては、殆んど天下の眞理を竭し得て、餘す所なきが如し

降る雪、出でたる月、隠れたる星、咲く花、落つる木の葉、甘きに集まる蟻、蜜をつくる蜂、巢を營む

蜘蛛、柳の枝に飛び付く蛙、軒石に穴を穿つ雨滴、何れ一として、動かすべからざる眞理と、教訓とを與へざるはなし

7
人あり、嘗て英國の物理學者ニュウトンに向ひ、如何にしてかくの如き、大發明をなせしやと聞きたるに、彼は「只常に思ふて止まざりし故なり」と答へたりと、蓋し宇宙の大學生は、己れの欲する所のものに向つて、常に念ふと念はざるによりて、得ること得ざるこの別を見るなり、基督は誠めて「神は自ら助くる者のみを助く」と

宇宙の大學校に三教師あり、其一を艱難、其二を
 經驗、而して其三を吾敵とす、語にも「逆境は人を作
 り、艱難は爾を玉にす」「經驗なき學問は、學問なき經
 驗に如かず」或は「爾の腕を磨くものは、爾の味方に
 非ずして、爾の敵なり」と

世の中は、眼あき千人、盲千人、人事必ず何等か
 の障害に遭遇するものなり、されど蒼空にかゝれる月
 の光よりも、雲間より漏れ出る月の、遙かに冴やけき
 に非ずや

Every cloud has a silver lining. MILTON

「失敗に同情、成功に敵」或は「疾風勁草を知り、喬木
 風強し」の言また味ふべし

己れの従事せる業務の如何を問はず、宇宙の大學
 生の、須く學ばざるべからざる科目五あり、一に信仰
 Faith 二に悔悟 Repentance 三に博愛 Love 四に感謝
 Thanksgiving 五に犠牲 Sacrifice 云々

ゲーテ曰く「信仰はあらゆる智識の極度にして、
 端緒に非ず」と、而して孔子は「過則勿憚改」と教ふ、
 一樹の蔭、一河の流も他生の縁、一茶の句に
 我れと來て遊べや親のない雀

10 相愛せんか、針の目も廣く、相憎まんか、天も地も狭からん

人をみな吉野の山の花と見よ

われを難波のあしといふとも

陶淵明は「夫の天命を樂んで復た奚ぞ疑はん」と、一本の蠟燭も、我身を盡して、他を照らすに非ずや

卒業證書

西諺に曰く「明日死ぬ積にて今日生きよ、永久に生くる積にて今日學べ」と、宇宙の大學校には、卒業てふことあることなし

11 一定の期間、一定の學校に通ひて、一定の科目を修め、將に社會に出でんとするや、其門出の躰として、卒業證書と名づくる、一葉の印刷物を與ふるの習慣あり、之を享くる者、動もすれば、その證書の眞意を誤解し、之を得ては、恰かも鬼の首にても、取り得たらんかの如くに思惟し、端なくも慢心を起して、將來を過るものなきにしも非ず

世間の所謂學校は、社會即ち宇宙の大學校に入るの豫備校に過ぎず、随つて卒業證書は、社會への入場券たる而已、眞の學問は、寧ろ學校を出づると同時に、始まるもの、水を涉りて、深さを知るべし、「ダウエンポートは、教育の最も大切なる任務は、自己に對し國家に對する、人の自負心を殺すことなり」といへり、世の父兄、學校長、或は何々學校卒業を鼻にかくる人、以て如何となすか、

試に、卒業證書に代ふるに、左の如き印刷物を以てせば如何

社會へノ入場券

何 某

右者、本校ニ於テ、何年間所定ノ學科目ヲ學習シ、初メテ己レノ如何ニ愚ニシテ、如何ニ何事ヲモ識ラザルカヲ悟ルト同時ニ、社會へ入ルコトノ過分ノ仕合ヲ感謝シ、更ニ左ノ六箇條ヲ眷々服膺センコトヲ誓ヒタルニ依リ、此券ヲ授與ス

一、學校出身者タルコトヲ鼻ニカケザルコト

- 一、如何ナル労働ヲモ辭セザルコト
- 二、如何ナル困難ニモ屈セザルコト
- 三、如何ナル事ニモ親切ヲ旨トスルコト
- 四、人ニモ事ニモ親切ヲ旨トスルコト
- 五、夢ニモ虚言ヲ吐カザルコト
- 六、一切人ニ迷惑ヲ掛ケザルコト

年 月 日

何々學校 長 團

母の愛

光格天皇の御製に

這へば立て立てば歩めと急ぐなり

わが身につもる老をわすれて

ジョンラスキンは、「人の目を樂ましむるものは、

蒼空に如かず」と、而して心の眼に、最も美はしく映

母の愛

ずるものは母の愛乎

16 呱呱の聲をあげてより、女なるがゆるぎに、入りては謙遜、出で、は辭讓、男の粗暴なるにも似ず、從順克く父母に孝に、兄弟に友に、嫁しては夫に和し、舅姑、小舅姑に事へ、常に己れを犠牲として、夢にも、功名の奴隷たることなし

小さき胸を痛めつ、漸く調へたる三度の食膳も、間、小言を以て迎へらる、世の男子、試に片時にても、女の身となりて見よ

一抱あれど柳は柳かな

千代

男子は外に出で、變化ある人生を送り得れども、婦人は内に在りて、變化なき生活を營まざるを得ず、男子に道ならぬ行ありとも、之を咎めんとはせず、克く忍び、克く守り、眼中、たゞ家あり、舅姑あり、夫あり、子ありて、己れなきものゝ如し

身もし妊みたらんか、行住坐臥、胎兒の爲に、己れの自由を束縛せられ、命を的に分娩を了れば、嬰兒の養育に、我を忘れて、日夜心を千々に碎く、旬に

親も子も泣くや霜夜の乳貫ひ

子もし病まんか、父は眠ることをすれども、母は

然らず、不眠不食、看病に當る、焼野の雉子、夜の鶴、
何れか我子を思はざる、中納言兼輔の歌に

人の親の心は闇にあらねども

子を思ふ道にまごひぬるかな

と、千代の句にも

さんぼさりけふは何處まで行つたやら

若し夫れ、母の、己れの凡べてを犠牲として、犠

牲となせることを、知らざるに至りては、血あるもの

誰か、萬斛の涙なからんや、げに母は犠牲と愛との化

身なり



試に、世の中より、母の愛を取除かんか、果して何物か残る、而して母の愛を、しかく重く思はざるは、畢竟、母の愛の、宏大無邊なる所以乎、愛に母の愛ほど全きものなく、犠牲に母の犠牲ほど尊きはなかるべし

世の人、忘るゝ勿れ、古今の偉人の悉くが、母によりて出されたることを、而してカーライル、ピスマーク、リンコーン、ナポールオン、秀吉等の偉傑が、また如何に母を思ひしかを

尊重せよ 母の愛

自重せよ 世の母

出發點

一滴の雨、落ちて山巔の一礫にあたり、碎けて分れ、一は礫の北に、一は南に、互に相距ること忽ちに、して十歩、而して更に百歩、やがて一は南麓に、一は北麓に、實に流水ゆきて歸らず、未だ日ならずして、

一は北洋に、一は南洋に、注いで永へに相別る、人生の行路や、またこの類乎

天は、辿る行路を、全く人に任せおきて、各をして各の運命を掌らしむ、而して人の運命は、その出發點に於て、定まるものには非ざる乎、基督は曰く「叩けば門は開かれ、求むれば與へらる」と、世の青年、己れの力にて何事かを、敢て成さんとはせず、滔々として、難きを避け、易きに就かんを欲するは、人生の首途に於て、自ら鶏口たらんことを避け、牛後たらんことを欲するものに非ずして何ぞや

若し一年の計にして元旦にありとせば、一生の計

は、正に出發點にあり、西諺に "Nothing dared nothing gained." と、虎穴に入らずんば、虎兒を得ずとの謂乎、その出發點に於て、一たび苦を避け、樂を求めて牛後たらんか、果して、何れの時か、鶏口たることを得ん、況んや牛頭たるをや

一里の差は、千里の失となる、出發點に於て、心して定めざるべからざるは方向なり、而して茲に、特に言はんを欲するは、方向一たび定まらんか、鐵椎の氣根を提げ、奮然として出發すべし、といふことなり、

何をか鐵椎の氣根といふ、敢爲の度量 Daring power を創
 作力 Initiative power 即ち是なり、この二力を兩翼として、
 勇往邁進せんか、萬里の鵬程も悠揚として、わたり得
 べく、天下亦何物乎、克く之を阻止する、性相近し、
 習相遠し

冀くば、徒に逡巡して、カーライルの所謂、「人生
 は躊躇なり」に終らざらんことを

一筋にこゝろ定めよ濱千鳥

いづくの浦も波風ぞ立つ

貧兒の幸福

植ゑて見よ花の育たぬ里もなし

心からこそ身は賤しけれ

快男兒カーネーギ、嘗て成功の祕訣を人に語り、
 「人生の行路に上るや、その身先づ貧家に生るゝを以
 て、最も必要とす、何となれば、貧兒の英氣、是れ成
 功の原動力なればなり」と

起きて働く果報者、凡そ世に、貧民の兒ほど、幸福なるはなかるべし、脛一本、腕一本の外、手足に纏ふものなきは、やがて、此世の旅を身輕にせよ、と特に寄せたる神の同情乎、然るに富家の子弟は、遺産相續てふ名の下に、金錢財寶、田圃山林、其他多くの重荷を、身の邊に、此世の旅を、却て難澁ならしめつゝ、あるに非ずや

天道私なし、常に善人に與みず、貧民の兒は、幼少の頃より、星に起き、月に臥し、櫛風沐雨、具さに艱苦を嘗められたれば、此世の旅に、つゆ不自由を覺ゆ

ここなきは元より、不平もなく、失望も

夫れ、隠れたる



貧民の兒



富家の子弟

信あれば、顯れたる感あり、財を積む千萬、薄藝身に
 あるに如かず、努力せよ世の貧兒、鐵心石腸、よし杖
 に縋ることも、夢、人に縋るなかれ、幽谷を出で、而
 して喬木に移れ、男子の本領、正に全力を注ぐにあり
 泣いて生れ、不平で暮し、失望で死ぬ、こは、蓋
 し富家の子弟に與へたる語乎、さても幸福なる世の貧
 兒よ、見ずや、天の、卿等に與へたる洋々たる前途を

士別三日

即當刮目相待

非復吳下阿蒙

日米富豪の子弟

の、流石は詩聖の作、誰乎一吟以て、壯美の感に打た
 れざる、されどその餘韻、施いて吾國富豪の子弟の上

五陵年少金市東 銀鞍白馬度春風
 落花踏盡遊何處 喚入胡姬酒肆中

李太白が、五陵貴人の子弟の、豪奢を敘したるも

に落つる時、果して如何の感かある、測らざりき、今日、唐の詩人より、邦國青年を教訓せよとて、この一詩を得んとは

さのみ富裕ならざるに、「若様」と云はるゝが儘に、

神聖なる労働を卑しむ、貴公子を氣取り、滔々として淫靡に流れ、世波に抵抗するの勇氣を失ひ、川柳子をして「賣家と唐様で書く三代目」この歎聲を發せしむるに至れるは、そも誰が罪ぞ、情も過ぐれば仇となる、世の父兄、舐犢の愛に溺るゝ勿れ

故鐵道王ハリマンは、四十年間に、拾數億の富を

作り、その死せし時には、全米國の鐵道は、一齊に五分間、列車の運轉停止をなせし程の、聲望を有したる人なるが、彼の長子は如何に、大學卒業後、鐵道工となりて線路に働き、或は機關車の火夫となりて油に塗れ、日夜劇しき労働に、従事し居たるが、昨日に變る今日、その父の歿して、大鐵道を經營するの重任の、雙肩にかゝり來るや、奮然起ちて、其後を襲へり、曩日一勞夫として、成功せし彼は、今日亦幾多の大會社を統率して、遺憾なく其辣腕を揮へり

如斯は、努力奮闘を生命とせる、米國に在りては、

正に日々目撃する一例たる而已、親の蓄積したる端金をあてに、遊蕩三昧に身を持ち崩し、醉生夢死、活くことを知らざる邦家の子弟、ハリマンに對して、何の顔色かある、生ける犬は、死せる虎にまさる

世の父兄よ、勞働によりて得る、有形の報酬のみに著目し、更に之が精神に及ぼす無形の感化の、偉大なることを忘るゝなかれ、安逸は意氣を沮喪せしめ、活動は潑刺たる生氣を養ふの原因ぞ

我國文明の先驅者福澤先生は、その修身要領の中に、「心身の獨立を全うし、自から其身を尊重して、人

たるの品位を辱めざるもの、之を獨立自尊の人と云ふ、自から勞して自から食ふは、人生獨立の本源なり、獨立自尊の人は、自勞自活の人たらざるべからず」と、述べ、以て世の青少年を誡めたり

細川忠興の壁書に、物の成らぬ人を評して

夜遊びや朝寢晝寢に遊山すき

引込思案油断不氣根

33
夫の歌を掲ぐ、篇中、横溢せる勇氣と、確固たる信仰の閃めき居るを見ずや

4. In the noontide glare,
 Oh! bright and fair
 Is the wide expanse of ocean;
 In the morn's first light
 'Tis a glorious sight,
 So full of life and motion.
5. When the tempests sweep
 The rolling deep,
 And the angry billows swell,
 I mind not the strife,
 Which to me is rife
 With thoughts that I can not tell.
6. When life's voyage is o'er,
 And I sail no more
 On the ocean's troubled breast,
 Safe anchored above,
 In the haven of love,
 May the sailor boy peacefully rest.


 THE SAILOR BOY'S SONG.

WRITTEN BY A GIRL THIRTEEN YEARS OF AGE.

1. ('') Oh! the sea, the sea
 Is the place for me,
 With its billows blue and bright;
 I love its roar,
 As it breaks on the shore,
 And its danger to me is delight.
2. Oh! I love the wave,
 And the sailor brave,
 Who often meets his doom
 On the ocean vast,
 And sleeps his last
 In a shell and coral tomb.
3. And, in the night,
 The moon's soft light
 Smiles sweetly on the foamy billow
 And many a star,
 As it twinkles afar,
 Seems to rise from a watery pillow.

労働は神聖なり

我庵は青天井に地の蕙

月日をあかり風の手箒

紐育土地建物株式會社の、耕作課の一農夫に文學
博士居たりき、彼は非凡の篤學者にして、螢雪、グリ
ーキ、ラペインを研究して、先年フリンストン大學よ

事せりき

り、文學博士の學位を授けられ、同大學より、招聘し
て教授たらんことを請へり、されど、彼は之に應ずる
の色なく、曾て「何故、かかる勞役を捨て、大學教
授の名譽職に赴かざるにや」と問へば、彼は莞爾とし
て「余は、澄み渡れる青き空を天に戴き、香ばしき大
氣を呼吸し、小禽の音樂に和しつゝ、馬匹と共に、一
心不亂に耕すほど、爽快なるはなく、常に神と共に棲
む心地して、去るに忍びず」と、依然として農耕に従

今を去るこゝ、凡八年前、紐育中央鐵道に便りて、

ニューヨークの郊外に位置せる、コロニーアル　ハイツといふ、一邸宅公園 Residential park に遊ばんものご、タツカホー停車場に下車したる時、二頭立の馬車を、自ら馭して、驛前に待てる、風采いやしからざる、一紳士あり、吾等夫妻を慇懃に迎へ、自ら案内の勞を乗りたり、計らざりき此馭者こそ、不尠銀行會社の重役、タスカー氏その人ならんごは、自ら紹介するに及んで、其身分に對し、其態度の、餘りに平民的なるに、一驚を喫したりき

かくの如きは、米國の紳士間に、屢く見る所にし

て、内地に於ては、容易に見る能はざる所とす

ジョン　ラスキン曰く「神は人の爲に最善の労働を選ぶ、而してそが各の爲に、善果を齎らすや否やは、其人の働きの如何にあり、各自は唯、感謝して働くあるのみ、之を疑ひ、之を怠りて、惡果の至るは、自業自得而已　ご、二宮尊徳の歌に

天地の恵みつみおく無盡藏

鋤で掘り出せ鎌で刈り取れ

人は神意を満足せしめ得て、初めて各自の満足を得べく、誠心誠意を以て、己が心身の勞を、提供した

労働は神聖なり

40

る場合には、神は必ず何等かの報酬を與ふるものなり
よし汚く稼ぐことも、清く暮せよ、時間を賣らずに
力を賣れ、此世に於て何事をかを成さんと欲せば、明
日なる語を眼中にすべからず、過去に執着せず、未來
を待たず、たゞ現在の、己れのベストを竭すあるのみ
つこめてもまた勤めてもつこめても
勤めたらぬは務なりけり

宣うまは
よけの

上等百四
よる

孝と成功

何をか孝といふ、曰く、親を喜ばしむることなり、
親を思ふ心にまさる親心、子故に喜び、子故に泣く親
を、子が喜ばしむるほど、容易なるはなし、於是乎更
に曰はん、孝は百行中、最も容易なるものなり
とし

明治天皇の御製に

獨立つ身となりし子を幼しと

思ふや親のこゝろなるらむ

41

孝と成功

親は、しかく、子を思ふものなれば、子のなせし
 些々たる親切も、こよなく、嬉しく感ずるものなり、
 子が家付の借金を、返済し呉れたりして、その子の肖
 像を神棚に祀り、毎朝御初を供して拜し、若し人の問
 ふあれば、こは我家の守神なりとて、涙と共に喜び語
 る親さへあり

子を思ふ親ほど親を思ひなば

世にありがたき子とや云はれん

孟子に、「泰山を挾んで、以て北海を超えよと、人
 に語りて曰く、我れ能はずと、是れ誠に能はざるなり、

孝は
 是れ
 孝也

長者の爲に枝を折る、人に語りて曰く、我れ能はずと、
 是れ爲さざるなり、能はざるに非ざるなり」と、世に
 往々、孝行難を口にするものありと雖も、之れ能はざ
 るに非ずして、爲さざるなり

孝已に至易なりとせば、百行、先づ孝より始めざ

るべからず、狄仁傑の「歸省」の詩に

幾度天涯望白雲 今朝歸省見雙親

春秋雖富朱顏在 歲月無憑白髮新

美味調羹呈玉筍 佳釀入饌鱸冰鱗

人生百行無如孝 此志眷眷慕古人

44. あゝ木静まらんごすれども、風止まず、子養はん
ごすれども親待たず、昨日は人の身の上、今日は我身
の飛鳥川、行基菩薩の

山鳥のほろほろごなく聲きけば

父かごぞ思ふ母かごぞ思ふ

孝したき身には親なし魂祭、今更に石に蒲團も着

せられず、の悔なきやう、常に心掛くべし、古歌に

父戀し母戀してふ幼子の

心を常に忘れずもがな

と教へたり、此心こそ、やがて、孝となるなれ

而して何をか成功と云ふ、曰く、人を喜ばしむる
ことなり、人は親の如くに、常に己れを思はず、故に
常に己れを思はざる人を、喜ばしむることは、常に己
れを思ふ親を、喜ばしむるが如く、しかく容易ならざ
るべし、於是乎更に曰はんごす、成功とは孝よりは、
難きことなりご

45 苟くも、世の中にて、最も容易なる孝を、行ひ得
ざるものは、孝よりは更に難き成功は、断じて之を期
すべからず、孝は成功の始にして、成功は孝の終なり、
故に孝なくして、成功なるもの更にあることなし、知

るべし、成功の、唯り孝子の門に而已出づることを

故ジエー、ビー、モーガンの應接振

米國銀行王、故ジエー、ビー、モーガンは、紐育市金融市場の中央に、堂々たる事務所を構へ、泰西の金融界を、意の儘に左右したりき、嘗て一新聞記者、經濟上の所見を聞かんと欲して、モーガンの事務所に至り、

取次の者に紹介の勞を求めたるに、取次の者之に應へて、「己れの用向にて來り、取次を煩はす要あらんや、モーガンは彼所に在り、自ら入りて面會を求めよ」と彼の記者、少時佇みて、聽て徐ろに、モーガンの机の側に進み寄り、いと慇懃に“Good morning, sir.”（お早う御座います）と挨拶せり、されどモーガンは、一瞥だに與へず、事務に餘念なかりければ、記者は重ねて、“Good morning Mr. Morgan.”（お早う御座います、モーガン様）と繰り返したるに、少時ありて、彼は悠然として、やゝ頭を擡げ、射るが如き眼光を記者に放ちつゝ、

“How did you get in here.” (如何にして此所に入りしや) 此あびせかけたり、是に於て記者は、“Stepped in sir.” (歩み入りました) と答へたるに、モーガンは、“Step out.” (歩み出でよ) と云ひ捨てたるまゝ、机に倚り仕事を續けて、また顧みざりしと

蓋し、モーガンは、周到なる用意を以て、最もよく聞きたる人にして、その聞き終るや、斷乎として、Yes (諾)、若くば No (否) の唯一言を與ふるを以て常としたり、而かも一度 Yes と云ひ、No と答へたらんか、如何なる事情のありとも、頑としてその決意を、翻へ

したることなかりき

「時は金なり」の俚諺の是非は、しばらくいはずもがな、少くとも光陰を虚しく費す、邦國人の應接振とは、其趣を異にせるを知るべし、昨日の紅顔は、今日の白頭、寸陰も尙之を愛まざるべけんや

かへり花かへらぬものは月日かな

虚白

カーネーギの光風霽月

十九世紀の科學の進歩につれ、父祖傳來の手工業は、機械工業の爲に奪はれ、家道日に窮り、一家を擧げて、遂に住み馴れし故國蘇格蘭を後に、海波千里の北米に移住したるは、正に彼が十歳の時なりき

糸巻小僧として、一週一弗二十仙の給料を、享けたるを始に、工場に入りて、穴藏の汽罐火夫となり、電信配達夫となり、或は電信技師となり、其間、正直

勤儉、克己を旨とし、有らゆる激務に堪へ、寸陰を利用して、修養に怠らざりければ、世の信用、益々嵩み、遂には鐵橋會社を起すに至れり、爾來堅忍不拔、事に當りし程に、機會は機會を生み、幸福は幸福を産み、日ならず、鋼鐵王として、小大無數の工場に、人を役する廳て五十萬、富を累ぬる無慮十數億とはなれり

睦じき中もこのころうこうとし

隣りに庫を建て、からのち

彼が致富の策を立て、一心に財の蓄積をなせし日、幾多の群小は、嘲笑の眼を以て彼を視、評して守

錢奴と呼べり、燕雀は鴻鵠の志を知らず、また鸞鳩の
鵬を笑ふと何ぞ擇ばん、西哲エマーソンは「To be great
is to be misunderstood.」(偉人たりとは人に誤解せらるゝ
ことなり) といへり

千兩箱富士の山ほど積んだこて

冥土のみやげになりやすまい

果然、カーネーギは、手を翻へしたるが如く、致
富のこことを止め、如何にして最も有効に、此財を散ず
べきやに就き、多くの人才を聘して、之が研究をなさ
しめ、廣く洋の東西に懸賞募集して、策を索めつゝ、

幾多の公共事業、慈惠事業に、富を頒つに日も尙足ら
ざるが如し、彼や、誠に富者の使命を自覺したる人と
いふべく、偉人の心事、光風の如く霽月の如し

繁榮は逆運よりも、人の徳を試めず、一層厳しき
試験なり、西諺に曰く「最後に笑ふものが最も上手に
笑ふもの也」

He who laughs last laughs best.

鐵齋畫伯の詩

人笑吾書癖

吾耽讀書樂

恰如南面王

萬卷享天爵

當代の畫家、富岡鐵齋翁の近什なり、翁、齡正に八十、矯々として塵を出で、假へば雲中の白鶴の如し、何ぞ其意氣の旺盛なる、また何ぞ其趣味の崇高なる
「四十五は鼻垂れ小僧、男盛りは眞八十」
とは、石塚左玄の作なりとか、先年この都々逸を耳にし、樂

隱居若隱居多き邦國には、稍應はしからぬ言草なりと、感ぜしことありしが、最近鐵齋翁の詩を得、またその近況を聞き、不尠我意を強くすることを得たり



邦人は、動もすれば、此世へ活きに來たるものなることを忘れ、些細の端金を獲れば、忽ち口實を設けて、隱遁せんと企つるが一般の習なるに、老の至るを

鐵齋畫伯の詩

人笑吾書癖

吾耽讀書樂

恰如南面王

萬卷享天爵

當代の畫家、富岡鐵齋翁の近什なり、翁、齡正に八十、矯々として塵を出で、假へば雲中の白鶴の如し、何ぞ其意氣の旺盛なる、また何ぞ其趣味の崇高なる

「四十五は鼻垂れ小僧、男盛りは眞八十」とは、石塚左玄の作なりとか、先年この都々逸を耳にし、樂

隱居若隱居多き邦國には、稍應はしからぬ言草なりと、感ぜしことありしが、最近鐵齋翁の詩を得、またその近況を聞き、不尠我意を強くすることを得たり



邦人は、動もすれば、此世へ活きに來たるものなることを忘れ、些細の端金を獲れば、忽ち口實を設けて、隱遁せんと企つるが一般の習なるに、老の至るを

忘れて、己が天職にいそしめる、翁の如きは、正に活ける世の鑑ならずや

趣味は須らく高尚なるべし、交る友を見て其人の人格を知る。こは、周く人の知る誠なり、職務の餘暇、古今の聖賢偉哲と相携へて、芝蘭の室に入る、世に讀書ほご、廉價にして、且つ有益なる樂みもなく、この樂みを知らざる者ほご、不憫なる者もなかるべし

鐵齋畫伯の畫が、殆んど天下一品として、何人も學び得難き、一種の氣品を存することは、蓋し伯の人格の背景に因るもの乎、人格、人格は實に畫龍の眼睛

なり

凡河内躬恒が、山の法師の許へ遣はしける歌に
世を捨て、山に入る人山にても

猶憂き時は何地行くらむ

楚の葉公、子路に孔子のことを問ふ、子路對へず、孔子その對へざりしを惜みて

其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至

何ぞ是を以て、葉公に對へざりしや、こ

コネデイカット沿岸の魚釣會

イエール大學の位置せる、ニユウハイブンを距る、程遠からぬ海濱に、ブランフォードと名づくる一小都邑あり、大西洋に面す、巍峨たる岩壁に老松を列ね、蜿々として遠く海上に臨み、翠色煙波と相映する所、恰も一幅の畫圖、而して此所に住める人、紳士に非ざれば淑女なり、温乎たる其容に接し、靄然たる其言を

聞くもの、誰乎油然として欽慕の情を起さざる、蓋し是れ、自然の佳景に育成せられたるものか

今を去るここ十有餘年、ブルックリン、インステイデュウト圖書館長たる、ハッチンソン嬢に、招かれて、二週日こゝに暑を避けたり、折しも日露干戈を交へたる時、さなきだに邦人を遇すること厚き米人は、一入心を用ひて、今日も明日も、町民を擧げて、爰に歓迎の催しは行はれたり、或日のこと、同地出身のヴァッサア女子大學生十八名よりなる魚釣會は、企てられたり



灣は恰も弦月の状をなし、山を後に、滄波を前に、
 無数の怪松断崖に懸り、千仞の絶壁深淵に臨む、涼風
 習々として、夏を忘るゝ海上に、一隻の輕舸を泛べ、
 嬉々として綸を投ずるは、雪白洋装の佳人十八名と、
 一名の敷島男子なり

其日、最も多く釣りたるものに、懸賞あり、いで
 我も亦日本男兒なり、異郷に出で、異郷の女子に敗
 をごりてはと、心を彌猛にはやらせつ、十八名と共に
 竿を垂れたるなり、餌を奪らるれば、競ひて、余が爲
 に之を付け呉れたれば、自ら手を下す要もなく、愉快

に時の移るを忘れたり、釣るゝは、ブリユウフィッシュ
ユ」さて、長さ五六寸ばかりの魚なり、聽て日も西に
傾く比、幸にも七尾を獲、當日の月桂冠は、遂に我手
に落ちたり

意氣揚々、晚餐の卓を圍み、得意満面、この日の
物語に花を咲かせし時、女學生の一人、不圖、口をす
べらして、"As expected" (望みし通り) と云へり、聞き
て不審に思ひ、隣席に坐せしものに、その意を糺せば、
「されば、吾々仲間同志、前日申合せて、遠來の珍客
に今日の勝を得せしめんものご、下相談し居たるに、

おのれを
はか
り
し
は
か
り
し
は
か
り
し

おのれを
はか
り
し
は
か
り
し
は
か
り
し

豫期せし通りに成りたるを喜べるなり」と

人を喜ばしめ、その喜ぶを見て喜ばんとする、氣
高き計らひなりしなり、さるにしても、己が修養の低
かりしことよ、背汗の思をなし、匆々行李をこゝのへ、
急遽此所を辭し、歸途に就けり、爾來何年、幾度の招
待にも、未だ再び、慚びて彼地に得行かず



恥を知れ恥を知らねば恥をかく

恥に過ぎたる恥はあらじな

心の快び

世の中の人には知らねど科あれば

我身を責むるわが心かな

肉體の快樂は、直ちに以て、眞の快樂といひ得る乎、設し口に美味を食ひ、身に錦繡を纏ふとも、科ありて、何の快かある、自ら反して縮からば、千萬人とも、吾往かん、快樂の根元、また心に在りて知るべし

Peace does not dwell in outward things, but within the soul.

FRANÇOIS DE LA MOTHE FÉNELON.

鹿追ふ獵師は山を見ず、肉の快樂のみ追ふに、之れ急なるものは、靈的快樂を味ふこと能はず、隴を得て蜀を望むが、人の常なれば、安樂は之を何程求め得とも、遂に底止する所を知らざらん、古歌にも

世の中は駕籠に乗る人擔ぐ人

尻のいたさに肩の痛さよ

色不異空、空不異色、色即是空、空即是色、色は

般若心經にある言葉なり、夢、肉慾の奴隷たること勿れ、肉體の樂みは、神心の悲み、心の快びを措いて、眞の喜なるものあることなし

心こそ心まよはす心なれ

心にこゝろ心ゆるすな

而して心の快びとは何ぞや、人を喜ばせて、其悦ぶを見て快ぶことなり、是れ即ち心の欲する心の快びなり、心の欲する心の快びを得んせば、須く己が肉體を犠牲と爲さざるべからず、句に
手折らるゝ人に薰るや梅の花

人を喜ばすことの難きは、己が肉體を犠牲となす勞あるが故にして、修養を積みたる人は、之が爲、何等の痛苦を感じざるのみならず、反りて愉快に覺ゆるものなり、孔夫子の言に

志士仁人、無求生以害仁、有殺身以成仁

と

蓋し修養とは、己が肉體を犠牲とする際に、覺ゆる苦痛を、變じて快樂と化せしむること乎

グリヴス曰く

Strive to realize a state of inward happiness,

奴隸と奴隸

北米合衆國十六代の大統領、リンコーンは、千八百六十三年の元旦、黒奴解放の宣言を發して、奴隸を廢止したりき、石川や濱の眞砂はつくることも、世に盜人の種はつきまじ」と、辭世を遺したる盜人もありし

とか、リンコーンによりて、黒人の奴隸は、廢されたりといへども、世に意志の奴隸はつきざるべし

思ふ、言ふ、行ふ、三者一致するものを、大丈夫と云ひ、然らざるものを、懦夫と稱す、思ふ儘を言ひ得ざるものも、言ふ儘を行ふ能はざるものも、凡べて奴隸なり

世評を恐れて、己れの言はんと欲する所を、言ひ得ざるものは、世評の奴隸なり、利害の爲に、己れが行はんと欲する所を、行ひ能はざるものは、利害の奴隸なり、金錢の爲に、己れの良心に反したる言行を爲

すものは、金錢の奴隸なり

誘惑と知りつゝ、之に克つ能はざるものは、性慾の奴隸なり、位置の爲に、言行を左右するものは、位置の奴隸なり、曲學阿世は、功名心の奴隸にして、虚榮の爲に、己れの能はざることを、正直にいひ得ざるもの、即ち "Can not afford" の、敢ていふことをなさざるものは、虚榮心の奴隸なり

太閤秀吉、黒田如水に問ひて、「天下何物乎最も多き」と、應へて曰く、「人なり」、秀吉更に問ひて、「天下何物乎最も少き」と、答へて曰く、「人なり」と、甚だ

面白き問答ならずや、完全に意志の獨立せるものを、眞の人となす

著者の敬愛する、世の人よ、奴隸となる勿れ、而して奴隸たれ、目のあたりの己れの義務の奴隸たれ、其最も忠實なる婢僕たれ、己れの義務は、天の使命なり、神の心なり

エマーソン曰く

So nigh is grandeur to our dust,

So near is God to man,

When Duty whispers low, Thou must,

The youth replies, I can.

意志の獨立

己れの意志全く獨立して、始めて釋迦の所謂「天上天下唯我獨尊」、基督の「神は爾の内に宿る」の境涯を味ひ得べく、神を恐れて、人を怖れざるに至るを得べし

意志の獨立を期せんご欲せば、肉體の要する衣食

住の獨立を期せざるべからず、衣食住は金錢を要す、

諺にも「衣食足而知禮節」「金錢天下を左右す」或は、

「黄金の前には帝王も脱帽す」と、蓋し金錢なくして、

衣食住し得ず、衣食住なくして、生存し得ざるが故乎、

宜なる哉、「輕忽の念を以て、金錢の問題を論ずる勿れ、

金錢は品格なり」と西哲の言へる

金錢の重要なること、既にかくの如しご雖も、金

錢は之を掌中にすべきものにして、心中にすべきもの

に非ず、而して金錢を心中にせざる唯一の方法は、之

を掌中にするに在り

74

衣食住に要する金錢を、掌中にせざるものは、多くの場合に於て、金錢を心中にするの虞あり、金錢一たび心中に入らんか、倏ち金錢の奴隸と化すべし

孔夫子曰く、「舟、水にあらざれば行かず、水、舟に入らば、即ち舟を没す」と、蓋し意志、金錢に非ざれば獨立せず、金錢、意志に入らば、即ち意志を没すの謂乎、人は黄金を役すべく、黄金に役せらるべからず、佛蘭西の諺に

Money is a good servant, but a bad master.

亡國の兆

75

羅馬の亡びたる時、市中に八百有餘の温泉場を存したりと、知らず邦國ほど狹隘なる領土に、多くの湯治場を有する國あるを、鐵道、電車軌道、多くは温泉場と遊園地とを連絡して、遊客を待つ、亡國の兆、其一なり

中流以上の家庭



浪費す、亡國の兆、其二なり

酒を交際の要具
と心得、之が爲に多
くの時間と能力とを



相互に時間を重んずる觀念、更になく、我れも人も、有耶無耶に、虚しく光陰を費す、亡國の兆、其三なり

銀行會社員を視るに、夏は扇、團扇を手にし、冬は手を火鉢にす、知らず何れの手を以て、働かんとするにや、喫煙と雜談との隙に、仕事に従ふ、亡國の兆、其四なり

領土狹隘にして、人口劇増するにも拘らず、國民の墳墓の地を去つて、海外に出でんとするもの、甚だ多からず、依然として蝸牛角上に、輸贏を争ふ、亡國

の兆、其五なり

西洋間こ、日本間こを兼ねたる家屋に住し、洋服を著し、和服を用ひ、靴を穿ち、下駄を履く、亡國の兆、其六なり

尠からざる學資を費して、高等教育を享け、社會に出で、己れに應はしき職業なしなど、とり止もなき理由の下に、神聖なる労働を避けんと欲し、徒に聲をなして、就職難を託つ、亡國の兆、其八なり
企業家が、企業に對する親切と熱心とを有せずして、眼前の小利に眼を眩し、國家百年の長計を誤る、

ニヶ國れ生活



亡國の兆、其九なり

80 歐米人の海外に出づるや、先づ墳墓を作りて、後徐ろに業に従事するを常とするに、偶、海外にある、我同胞の一舉一動、殆んど腰掛的ならざるはなし、亡國の兆、其十なり

娛樂ごしいへば、室を密閉して、空氣の流通を絶ち、身體の下部を壓迫して、血の循環を止め、脂煙草を燻べながら、睡眠の時刻をも忘れて、圍碁、將棋、骨牌其他賭博的遊戯に耽る、亡國の兆、其十一なり

海外の事情に膏きものが、動もすれば、何國の排日なご、東洋獨特の排外思想を、臆面もなく、廣言し、其禍の却て、邦國に及ぶを知らず、亡國の兆、其十二なり

師は三世のちかひなごの誠もあるに、幼少の頃、受けたる師の恩を忘れ、報恩反始の徳義に悖る、亡國の兆、其十三なり

舉りて、依頼心、嫉妬心、猜疑心の奴隸となる、亡國の兆、其十四なり

α 三 根 性 H

に此三根性を有するほど、恐るべきものはなし
に此三根性を有するほど、恐るべきものはなし

堂々たる學校出身者が、長年月の間、慈親と恩師
より、養育と教育を受け乍ら、其社會に出でんと
するに當り、己が就職の道の手數迄も、尙父兄及先輩
を煩さんとする、自助の精神の、人生に於て如何に大切
なるかを知らず、飽迄も人に頼らんとする、所謂据膳

的處世法を望む、是れ依頼根性なり

かくの如きは、單に其一例に過ぎず、有らゆる階
級を通じて、有らゆる方面に於て、有らゆる形式にて、
有らゆる依頼心を發揮せり、就中、官尊民卑の弊を託
ちつゝ、尙經濟界の活動を、政府の財政方針に俟つが
如きは、依頼心の完全に發展せる證左に非ずして何ぞ、
向後、大に海外發展に俟たざるべからざる、運命
に逢著せる邦人は、この依頼心を撲滅せずして、果し
て海外何れの地にか、自家の立場を發見せんとはする、
國內にあると同じ筆法を以て、海外の政府に俟たんと

する歟、爰に余は、孟子が齊の宣王に曰ひたる所を以て、其蒙を啓かん、曰く、かくの如きは、木に縁りて魚を求むるより、甚しきあり、木に縁りて魚を求むるは、魚を得ずと雖も、後の災なし、若かく欲する所を求むるは、心力を盡して之を爲して、後に必ず災あらん、と

憎むとも憎みかへすな何時迄も

憎み憎まれ果しなれば

凡そ邦人ほど、嫉妬心を有する國民は、非ざるべし、その内地にあると、海外にあるとを問はず、茲に

此言也

彼等の言はれし言を
余は得たる言を
此言とす

誰か、水平線以上に、頭角を顯はさんとするものあらんか、教育家といはず、宗教家といはず、軍人といはず、政治家といはず、實業家は元より、官吏、學生々徒、さては職無き天下の浪人に至るまで、己れを忘れて、私に根據なき中傷を捏造し、水平線以下に引下さん謀る、然るに之を歐米人に見よ、彼等は同僚中、拔群の輩を見出さんか、相携へて、陰に陽に之を援け、聽て共に向上を企つるに非ずや、之れ前者の甚だ振はざるに反して、後者が世界到る所に發展せる所以なり、
「出る杖は打たる」とは、邦國の辭典にのみ見る諺乎

If others vex you by their words or deeds, or whatever happens to you that causes you distress or pain, it will all help to fit you for a noble and blessed state.

JOHANN LAUTNER.

有史以來、一小島内に蟄居して、相互に鬢の毛を牽き合ふことを、これ努め、端なくも猜疑心の増長、その極に達し、國內は全くこの根性の、競馬場裡の如き觀を呈するに至れり
邦國の發展を阻止する、本能寺の敵、甚だ妙からずと雖も、未だ嘗て、其恐るべきこと、如上の三根性



の如きものあるを見ず、世の識者よ、希くば、之が打破に全力を注ぎ、以て國民修養の、焦眉の急を忽かせにせざらんことを

明治天皇の御製に

廣き世に交りながらいかなれば

狭きは人のこゝろなるらむ

最も有効なる健康法

散步、水泳、體操、遊戲、擊劍、柔道、庭球、野球、角力、漕艇の運動を始とし、冷水摩擦、腹式呼吸、田園生活に至る迄、觀じ來れば、健康法の種類甚だ尠しとせず

然れども、これ等の健康法の總べてを行ひたるよりも、更に一層有力なる健康法のあるを忘るべからず、そは如何なる日にも、如何なる所にも、如何なる事ありとも、恰かも怒濤の中に立てる磐石の如くに、泰

最も有効なる健康法

最も有効なる健康法

90 然として、内に麗日駘蕩たる平和を保つこゝ是なり、
マーク アントニーは

Be like the promontory, against which the waves continually
break; but it stands firm, and tames the fury of the water
around it.

絶えず逆襲する怒濤を人生とすれば、中に立てる
磐石は人なり、狂瀾天に朝して、巨巖を搏ち、波は碎
けて雪と散る、見るべし、外界の轟々たるに似ず、か
の巖の中心には、不断完全なる平和の、維持せらるゝ
を、また激浪に磨砕せられて巖角の益圓滿となるを

人生とせよ
まじりあはさるゝ

Do not lose your inward peace for anything whatsoever,
even if your whole world seems upset.

St. FRANCIS DE SALES.

寺院と動物園

91 鄙に都に、至る所、倭屋の累々たる中に、巍然と
して聳ゆるは、寺院に非ずや、到り参拜するに、何れ
寺院と動物園

も羅漢の祭らるゝを見る、若し夫れ、試に、全國の寺院に安置せらるゝ、羅漢の數を計へんか、決して、百千の少數にはあらざるべし、而してこゝに、更に驚くべきは、各戸に、米食ふ羅漢即ち働らかなの、蔓延しつゝあることなり、先見の明ある父兄は、往々此羅漢を勘堂に祀れるもあり

借問す、働らかなの羅漢、卿等は此世に於て、働らくことを欲せず、彼の世に於て、働かんと欲する耶、安息は死して何日にても得らるゝもの、寧ろ此世に於ては、働らくといふ樂を、味はんとは欲せずや、カー

ライル曰く

Whatever thy hand findeth to do, do it with all thy might.

人、或は國內に、動物園の見るべきものなしと、そは甚だ見聞の狭きこと哉、見よ、我國には至る所、珍禽奇獸を飼養せるに非ずや、鳥には借金鳥あり、掛鳥あり、貝に厄介あり、魚に酒のみ鯛あり、獸には、のろ馬、さん馬を始とし、最も多く繁殖せるを怠けものごす

憂國の士、冀くば先づ、羅漢となまけもの退治をなしては如何、畏くも

大いにやうへし



明治天皇は

としごしに思ひやれども山水を

くみて遊ばむ夏なかりけり

と、
宣へり

阪神電車の揭示

幼き頃、夏休みを利用して、上海、蘇州、杭州に

阪神電車の揭示

旅行したるに、上海在留の外国人によりて、經營されたる楊子江沿岸の、さる小遊園地の出入口に、左の如き掲示あるを見て、子供心にも、尠からず、不審を感じたることありき

支那人ト犬トハ出入ヲ禁ズ

自國の一都市の中央に、外人によりて、かゝる告示を掲げられて平然たる支那人、之を掲げて平然たる外国人、共に其度量に驚かざるを得ざりき

數年前、七年振にて、米國より歸朝し、始めて阪神電車に乗りたる時、正に左の如き掲示を目撃して、

NO SMOKING

右堅く御斷り申上候

たばこのむこと
たんつばはくこと
はだ
ふともふ
だすこと

其掲示が、同胞の手によりてなされたることを知り、端なくも十有餘年前、上海にて視たるそれを想ひ起さざるを得ざりき

流石は場所柄さて、外國人の乗客も多からんご、豫期したるもの乎、さりさてこの掲示によりて、兩者文明の程度を暗示せるもの

に非ざる耶、聊か異様の感なき能はず

先づ、東洋文明の木鐸を以て自任せる同胞の、かくの如き揭示をなしたることに、一驚し、屢乗合ふにつれて、其必要を認め、再驚し、爾來四年を経たる今日、一等國民なりと自負しつゝ、尙この揭示のあるを見ては、更に三驚を喫したり、寒心の至りにこそ

然るに、内地に在りては、この揭示によりて見らるゝが如く、英語を話す國民と、邦人との間に、文明の程度に差あることを認識し乍ら、一步海外に踏み出せば、常に「我れは神國男兒なり」の自負心を、貫か



欧米の電車



内地の電車

んとする同胞なしとせず、矛盾の極ならずや

善悪の人を見る目はありながら

わが身の上は烏玉のやみ

外人に向つて神國男兒なりとの自負を、口又は素
振りに表はすは、恰も支那人が、中華を以て自ら誇り
とするに同じ、我れの見て快からず感ずる如くに、彼
れの聞きても、亦怪げに感ずるならん

桃李不言 下自成蹊

神州男兒 宜しく、自ら之を口にせずして、躬行以て、
外人に、之を認めしむべし、行の伴はざる言を、妄に

口にし、或は鼻にかくるは、神國男兒の本領に非ざる
べし

華嚴の瀧と一粒の米

盲目の模範村長、愛媛縣温泉郡余土村の人、森恒

太郎氏は、曾ては少壯政治家として、望を將來に囑せ
られし人なるが、不幸にも、明治二十七年九月の頃よ

華嚴の瀧と一粒の米

り、悪性の眼疾に罹りしかば、尠からざる費用を投じ、百方治術を施したりしも、甲斐なく遂に失明の人となれり、時に老母と兩兒の家在るあり、徒に我身の生き長らふるは、彼等三人を死地に導くもの、折もあらば自殺せんご、意を決したるご一再ならざりしある日のご、慈母の薦むる食膳に向ひ、今日こそは、豫ての覺悟を果さんものご、懷劍を坐下にしおばせ、何心なく装ひつゝ、食事をもそこそこに、聽ていざさらばといふ刹那、一粒の飯の、指頭に觸るゝあり、何心なく拾ひ上げて揉み潰しつゝ、不圖幼少の

比、兩親が、食膳に向へば一禮せよ、一粒の飯も決して粗末にするな、ご教へたるに想ひ到り、この一粒、何故に、かく迄も、尊重せらるゝにやご、自問自答、つひに豁然として悟る所あり

「さなり、この一粒には無量の意味を含む、彼の一粒の米が、生産を増大し、子孫を繁殖せんが爲には、水旱風雨の苦も、病菌害虫の難をも辭せざる而已かは、向上發展して、人と同化せんが爲には、摺られて衣を脱ぎ、春かれて皮を剥ぎ、身を焦熱の釜中に投ぜらるるをも敢て厭はず、遂には食まれて消化され、全く身

を滅盡して一生を終る、あゝ米や尙ぶべし、身を犠牲
として、その使命を全うす、我れ今、萬物の靈長たる
人に生れ、僅に盲目の故を以て、虚しく身を捨てんこ
す、あゝ過てり、かくては一粒の米にだも及ばず」

と、今更の如く、驚くと共に、全身の血は沸き、
始めて日光を見るの心地して、いで此世のために、此
身を犠牲にせんこ、大悟徹底、爾來唯々愉快を感じつ
つ、盲目の不自由を忘れて、東奔西走、自治發達の爲
に、席の暖まる暇なく、居村の長に擧げられては、之
が改善經營、其宜しきを得、遂に今日の名聲を博する

に至りしこ

明治天皇の御製に

おのが身をかへりみずして人の爲

盡くすや人の務なるらむ

この世をば、思ふまゝにならぬが浮世と誤解して、
厭世的自暴自棄となり、輕卒にも、淺墓にも、華嚴の
瀧、淺間の噴火口に飛込みたるもの、飛込む迄の勇氣
なきも、尙その以上の厭世家の、我青年間にあるは、
歎すべきの至ならずや、彼等宜しく、森村長の話を味
ふて可なり、句に

蒲公英や幾日踏まれて今日の花

彫卯

初夢

甲山の眺望を後に、茅海の佳景を前に、鬱々たる
千古の森を以て周圍し、泉石の排置をして更に趣を添
へしめたる庭内に、去年の暮よりふり撒かれたる砂上
の、箒目もいと正しく、人をして悚然たらしむ、之を

西宮神社の境内の元旦とす、破顔一笑、社頭に顯はれ
たるは、即ち戎の神なり、余を迎へて語るやう、卿は
頃日、阪神の間に別邸を索めむとしか、十日戎も迫れる
今日、余は衆生の諸願を耳にすることの、五月蠅けれ
ば、幸ひ、卿に之を譲らん」と
余は「社の位置、眺望共に佳にして、庭園の風致
も捨て難けれど、たゞ余が此處に居住を移さんには、
家屋につきて二ヶの望あり、一には余は至つて寒むが
りなれば、各室に暖房の設けを施すこと、二には社前
の賽銭箱の上に、大聲蓄音器の喇叭口を具へ、管を長

くして、奥の一室より、數名の書記をして、善男善女
 が、一二錢を投じて、「家内安全五穀豐穰」「商賈繁昌相
 場必勝」「世上物騒我身息災」三口に任せての放言を、
 聽取らしめ、之に各、其顔色、住所、氏名、年齢、職
 業を添付し、印刷に附して、世に公にせん」とす」こ
 戎、手を拍ちて「面白き考案なり、早速造作にか
 からん」こ

折ふし、若水汲む井戸車の音に、不圖も、わが夢
 は破られたり、古歌に

祈りてもしるしなきこそ驗なれ

禱るこゝろに誠なれば

嘘ならざれば通れぬ關所

勸進帳の辨慶が、安宅の關所を越えし昔は去りた
 れども、大正の今日に於ても、尙繁文縟禮、形式の關
 所てふものありて、嘘を以てなさざれば、通關を許さ
 れず、世にこの關所を、難なく切抜くる法を、會得し

嘘ならざれば通れぬ關所

たる人を、或は俗に古狸とも評するもあれど、一般には之を世故に長けたる人と稱し、後進者より少なからざる尊敬を拂はるゝ「先輩」とす

試に、其通關手續の一二を例證せんか、官公署は元より、學校に奉職せるもの、若し止むを得ずして、缺勤をなさんと欲せば、正に左の如くにして届出づべし

缺勤御届

私儀本日病氣ニ付缺勤仕候間此段御届申上候也

年月日

職氏名 印

、、長殿

決して「妻の病氣看護の爲」とか「悴出發見送の爲」とか「知己送葬の爲」とか「婚禮の爲」など、事實を具申せざることなり、若し正直に事實を記さん乎、關守忽ち通關を拒止すべし、かゝる場合は、假病に限るとせられたること、其一なり

官公署、學校に於て、必需品を買入るゝ時、假に

三個壹圓の物ありたりとせんか、一個の單價は參拾參錢參厘參參ゝなり、正直にかゝる領收證を提出せん

乎、會計係に叱らるゝべし、宜しく三個壹圓貳錢、單價參拾四錢と書かざるべからず、甚しきは、滑稽にも、來賓に供したる茶菓代を、油代或は炭代と稱して、之を請求すること、其二なり

監督官が、財産調べに来れる時、帳簿上に、五脚とある机の、四脚よりなき場合には、其内一脚を態々破壊して、完全なるもの三脚、破損二脚而して計五脚と答へざるべからざること、其三なり

要は凡べて、不便不備極まる、法文規定に適するやう、あらゆる嘘を工夫捏造して、之を上申し、殊更

に事實を曲げて記帳し置き、揚句に、不肖在職何年さしたる失策もなく云々、鼻高々に麗々しく挨拶を述べて、己が経験を誇る人なきにしもあらず、古今集に

偽のなき世なりせばいかばかり

人の言の葉うれしからまし

さりごと、兒童に、夢にも嘘を吐く勿れと、常に訓戒せる教師、世の革正を以て自任せる官途の仁士、御都合の如何によりては、嘘も亦方便として、自ら許して、敢て顧みるの要なしとする乎

手品師中の手品師

火の車に乗り、短銃の的となり、水を變じて色紙となし、卵を瞬く間に親鳥と化す、其奇や妙と言ふべく、若し夫れ、光芒閃々たる刀劍を吞吐するが如きに至つては、見る者誰乎慄然たらざらん耶、世之を行ふものを名けて手品師といふ

虚言を吐く者を俗に嘘八百と稱し、怪我に實を傳

ふるものを俗に千三つと名く、而して米國にては、虚言を吐くものを、手品師中の手品師と呼ぶ、何となれば、虚言を吐くものは、社會より、己れの全身を、己れの口中へ、自ら嚙み乾す者にして、世に更に巧妙なる手品師なければなり、拙堂和尚の歌に

八百の嘘を上手にならべても

誠一つにかなはざりけり

と、我國にては俚諺にも「人を見れば泥坊と思へ」

「虚言も方便」と云へるが、米國にも之に類したる俚

諺あり「虚言を吐いたら泥坊なり」と、試みに兩者を

比較せんか、彼我倫理思想の差の如何を知るに足らん

運動屋

學生々徒にして、學問を餘所にし、教育に害ある程、過度に、浮身を脩して運動に耽る、名けて運動家と呼ぶ、選舉に際して、東奔西走するもの、亦運動屋なり、其他、己れの腹を肥やさんと欲して運動し、地

位を得ん爲に運動する、所謂運動家、擧げ來れば其數甚だ尠からず

就中顯著なるものを、内地の商工業會社が、經濟界に於て、經濟の理法に従つて、商工業を營まんとは欲せず、唯贈賄、收賄てふ運動を之れ事とする、商工業會社と商號を掲げたる、贈賄收賄の運動屋なりとすこの種の商工業會社に於て、大に用ひられんと欲せば、倫理及經濟思想の多寡よりも、寧ろ巧妙なる運動屋の骨なるものを會得せることを要す、這般の消息に通ぜざらん乎、其人格の如何に崇高にして、其經濟

思想の如何に豊富なるものありと雖も、この種の商工業會社の蔓延跋扈せる社會に於ては、正に低能兒に非ずんば無能者なり、矛盾、顛倒の極と謂ふべく、而してこの種の運動屋の歡迎さるゝ間は、其社會は、病的なり不具なり、既に病的なり不具なり、其治療を措て、其社會の健全なる發達を期する、恰も二階から目薬の觀なき能はず、グレンシアムは、悪貨は良貨を驅逐す、赤痢、虎列刺の如き一時的悪疫の、流行するにだに、狼狽し、焦慮百方、警戒しつゝある官民、白晝大道を濶歩せる、我經濟界のこれ等の微菌を、如何にして驅

除せんとする乎

取締役監査役

株式會社の機關を、一株主總會、二取締役、三監査役とす、取締役は、會社を代表して、其業務を執行し、監査役は、會社財産の管理及業務の執行につき、取締役を監督す、而して商法第百八十四條には、監査

役は、取締役又は支配人を兼ねることを得ずと、規定せり

取締役、監査役を俗に重役と稱し、法律の規定する所によれば、一は監督者たり、一は被監督者たれども、實際は兩者、情意投合、利害を一にし、一舉一動有耶無耶の間に互に納得し、株主及會社との取引者の利害の如何よりは、寧ろその多くは、常に己れの利害を計ることに之れ汲々たり

かくの如きは、會社の株主の爲に設けられたるにも非ざれば、將又會社の取引者の爲に設けられたるに

も非ずして、正に取締役の爲に、而して監査役の爲に、設けられたる取締役監査役に外ならざるなり



千手觀音

米國の顯職高官、さては、會社銀行の重役には、年少者寧ろ多し、これ其思想の斬新にして、體力亦旺盛なるの故を以て、重く用ひらるゝなるべし、然るに、我國に於ては、之に反して、殆んどその思想、體力共に頽齡に近き、年長者を以てするを、習とするの觀あり

り

斯の習慣あり、爲に老人は老人ならではと自任し、若き人も老人ならではと誤解せるもの、如く、企業としいへば、必ず老人連の名義を要し、有名無實の所謂名義の貸借、盛んに行はれ、羊頭を掲げて狗肉賣らる、誰乎己れと世を欺くものに非ずといはんや

名義を貸す者、甚だ大膽なれば、名義を借る者、亦極めて横着にして、茲に更に不可解のことは、この老人が各方面の各種の事業に、手を延ばせることなり、そもそも開闢以來、四方八方に手を出して、成功せる



ものは、獨り千手観音あるのみ、我國の會社銀行の重
 役は、多く千手観音乎

元來、一人一代一事業にて足るものを、一人にて
 一事業以上に従事するものは、多藝は無藝、一事業に
 も成功せざることを、自ら豫言せるものには非ざる乎、
 人果して萬能なりや、語に曰く、「始あらざるなく、終
 あるもの妙し」と



人と交るの秘訣

カーライル曰く「誠たれ」と、蓋し一言にして、人と交る秘訣の蘊奥をたゞけるもの乎、語にも「友を得んと欲せば先づ己れ友たれ」と

テニソンとカーライルとは、対面時餘、未だ一言をも交さずして、能く交り得たりきこか、云はぬは云ふに優る、兩雄、心膽相照して、無言の間に、心交を遂げ得たるもの乎

人と交らんと欲して、住居、被服、飲食、歌舞、

音曲、談話等を以て唯一の策と心得、己れの心の準備を忽かせにするもの、宜しく味ふて可なり、杜甫の貧交行の詩に

翻手作雲覆手雨

紛紛輕薄何須數

君不見管鮑貧時交

此道今人棄如土

心だに誠の道にかなひなば、よし山海の珍味なくとも、歌舞音曲の饗應なくとも、居は茅屋にして、身に絹布を纏はずとも、そもそもまた何の陋か之れあらん哉、誠は心交を結ぶ第一の秘訣なり

曾て聞く、一畫工、其友の肖像を寫すに、其友、

右頬に汚點ありければ、半面の圖を描きたりこ、面白
き話かな、常に同情と愛この眼鏡を用ひて、人を見よ、
魚心あれば水心あり、友の短所を見ずして長所を探る
は、聽て是れ心交を結ぶ第二の秘訣なり

明治天皇の御製に

過をいさめ交して親むが

まことの友の心なるらん

吾輩は教育家なり

校舎に於て、教鞭を執るものを教育家とせば、工
場に於て、商品の製造に従事するものを製造家とし、
田畑に於て、鋤鋤を手にするものを農業者とす、而し
て經濟界に於て、商工の業に従事するものは、實業家
にして、教會に於て、説教するものは宗教家なり
宗教家は信徒を作り、實業家は金を作り、農業者
は田を作り、製造家は商品を作る、而して教育家は人
を作る、教育家の任務や亦偉大にして、崇高なるもの

吾輩は教育家なり

こいふべし

廣き意味に於ては、教育家は、單に校舎にある教師のみに限らず、家庭に於ては父兄、會社に於ては、凡べての先輩、亦教育家にして、その子弟に對し、後輩に對し、教育家たるの義務 Duty、資格 Qualification を兼ね有するものぞ、この意味に於て、凡べての人は教育家なり

凡べての人よ、希くば「吾輩は教育家なり」この理想を有せよ、一言一行、何人かに、何等かの感化を與へよ、自重慎獨、以て言行を正うせば、不知不識の

間に、不尠良感化を他に及ぼし得るものぞ、俚諺にも

勸學院の雀、蒙求を囀り

門前の小僧、習はぬ經を讀む

と、試に、所謂教育の門外漢を、無名の教育家とせん乎、無名の教育家が、有名の教育家に優りて、有せる教鞭は、正に躬行の二字なり、竹の鞭に代ふるに、躬行の鞭を以てせんか、その結果の及ぶ所、或は有名の教育家をして、三舎を避けしむべく、「學校教育は校門を出でず」てふ歎聲は、其生命を失ふに至らん

努力せよ無名の教育家

吾輩は教育家なり

自重せよ有名の教育家

習字と體操

現在に後注
しつたり

學校の程度の進むに従ひて、學生々徒の、漸く等閑視せんとする、傾向を有する科目を、習字と體操とす

習字によりて、修身の採點をなし得べしと迄、確

信せる教育家すらあり、古來「書はその人の性格を表はす」ことも云へり、簡單なる習字とは雖も、之より悟り得べき、徳決して尠しとせず
若し夫れ、端坐黙考して、一管の筆に、全幅の精神を、傾注して揮毫せんか、其間、微しの邪念も、爲に乗ずるの隙なく、修養上極めて大なる力となるものぞ

習字は啻に、修養上に益あるのみならず、文字は言語と共に、意志表示の機關にして、下手より己が受くる損失は、自業自得とはいへども、その亂悪不明の

文字を以て、人に迷惑を掛くるに至りては、其罪決して輕しとせず、かゝる大切なる習字科を輕んずることは、そもまた何の謂ぞや

習字と同様の運命に陥り、同様の待遇を受くる所の他の科目を體操とす

麗かなる空を天に、美しき光線に浴し、新しき空氣を呼吸しつゝ、教官の命令の下に、一齊に體軀の運動をなす程樂しくして、味ふべき科目、體操を措きて他にあらんや

若し夫れ、一段の趣味を以て、この科を修めんか、

啻に體軀を鍛ふに止まらず、規律、服従、共同心の養成等、精神上に及ぼす効果は、蓋し幾何ぞ

建築と趣味

135
凡そ邸宅の建築ほど、趣味多く趣味深きものはなかるべく、同時に其建築によりて、主人の趣味の如何を窺ふことを得べし、其家の主人が世に所謂俄分限者を

にして、たゞ金銭のみを多く掌中にし、其人格の修養、
 之に伴はざるものあらんか、恰かも木に竹を繼ぎたる
 が如く、玉石混交したる建築をなし、却て世の笑の種
 となること甚だ少からず

世に建築ほど、建築者の性格を、忌憚なく露すも
 のはあらず、米國の建築の多くが、開放的 Open なる
 は、聽て米國氣質の開豁的 Open minded なるを示し、内
 地の建築の多くが、高き塀を以て圍ひ蟄居的なるは、
 聽てその因循なるを表はせるには非ざる乎

邦國の庭園の、概して箱庭的なるは、眼界、胸量

共に甚だ狭きを示し、米國人の庭園の、壯大なる景色
 の見晴を有せるは、他に事情もあらんも、聽て彼の思
 想襟度の大なるを示すもの乎、阪神間に於ても、同胞
 の登山には、寧ろ峻峻なりとせる、かの六甲の巔に、
 無慮數十の外人の邸宅を築けるを見ても、如何に彼等
 が、壯大なる、自然の庭園を好むやを知り、その性格
 の一般を覬ふことを得るには非ざる乎

一言一行と人格

人は人工的に、一言一行を爲し得れども、其一言一行に依て、自ら露見する人格は、人工的なるを得ず、古歌に

底ひなき淵やはさわぐ山川の

浅き瀬にこそあだ波はたて

書家は、書を以て其性格を見るべしと云ひ、音楽家は、聲色を耳にして、其人と爲りを知り得べしと云ふ、夏目氏漱石は、文展を見たる評論中に「藝術は自

己表現に始まつて自己表現に終る」と云ひ、文章家は「文は人なり」と云へり

よく出逢ひ頭に「何ちらへ」「一寸そこまで」「あーさうですか」と問答せるを聞く、その何を話しつゝあるにや、誠に曖昧なる會話ならずや、かゝる言葉を常に話し、常に聞きて、敢て異とせざるは、話す人、聞く人、共に不得要領の交換をなせるものなり、英國の俚諺に、「談話は心の畫なり」と謂ひ、論語にも

一言以爲知、一言以爲不知

と、こゝに要談ありて來る人、冒頭を長くして、

將に立ち去らんとするとき、恰かも序なるかの如く装ひ、「時に」の前置詞をおき、漸くその用向を話す、聞ける人「まゝ考へて置きませう」「かしこまりました」と、其場逃れの答を以てし、彼の去るや、更に顧る所なきが如き、正に無責任と無責任との、相互披露に非ずして何ぞや

古人は誨へて、君子は一顰一笑も忽かせにせず、と云へり、一本の手紙、一物の取扱、一品の買入、一個の贈物たりと雖も、その人の人格は伺はるゝものを、心すべき事にこそ

商品の粗製と人間の濫造

141
 窮しては、明日の百より今五十、國民、常に眼前の小利に眼眩みて、遠大の大利を顧るの暇なく、片時をも早く、唯々金錢を掌中にせんは是れ祈り、從て矢鱈に、その場逃れの商品を粗製して、賣付けんを欲し、己れの商品をして、己れの信用を傷はしめ、自暴自棄

の極、聽て國家の體面をも汚がす、俚諺にも、「身から
 出た錆」情は人の爲ならず、「いそがば廻れ」と

商品の粗製を以て、夙に普く知られたる邦國は、
 領土の狹隘、人口の密度に於ても、また世界に例な
 らんこせるにも拘らず、極めて無造作に、人間を濫造
 するを見ずや、年々増加する、六七十萬人のみを以て、
 直ちに膨張的國民なりと早呑込みする勿れ

商品の市場を求めて、商品の粗製を警むること共に、
 人間の俗に所謂は、き場を考へ、須く人間の濫造を戒む
 べし

知らずや、粗製されたる商品と、濫造したる人間
 とは、共に世界の市場に、其賣行の抄々しからざるこ
 とを

榮螺と鎖國

道話に榮螺の卑下自慢の話あり

「アノ榮螺と申す貝は、手丈夫な手厚い貝で、し

かも丈夫な蓋がある、ソコデあの榮螺が、何ぞこいふ
 こと、うちから蓋をびつしやりしめて、丈夫な事ぢやこ
 思ふて居まする、鯛や鱸がうらやましがり、コレさゞ
 るや、おまへの要害は大丈夫なものぢや、うちから蓋
 をしめたがさいご、外からは手がだせぬ、さりこては
 結構な身上ぢやと云へば、榮螺が髭をなでて、おまへ
 方の其様に云ふてくれるなれど、あまり丈夫な事もな
 い、しかしながら、マアかうしてゐれば、まんざら難
 儀なこともないこと、卑下自慢をしてゐるとき、ざんぶ
 りと音がする、榮螺は内から急に蓋をしめて、じつと

考へてゐながら、今のは何であつたか知らぬ、網であ
 らうか、釣針であらうか、是ぢやによつて、要害が常
 にしてないこと、ごうもならぬ、鯛や鱸は捕られたか知
 らぬ、さても心もこない事ではある、シタがまづおれ
 は助かつたこと、兎角するうち時刻もうつり、モウよか
 らうこと、そつと蓋をあけ、あたまをぬつとさし出して、
 そこらを見まはせば、何となう勝手が違ふやうな、よ
 くよく見れば、魚屋町の肴やの店に、此さゞる十六文
 こと、正札付に成つてゐました」
 こと、維新の時まで、榮螺にさも似たる鎖國の結果、



端なくも、こゝに得たる國民の排外思想は、海外に於ける、所謂排日若し如斯文字のあたれりこそせば—のそれよりも更に手強く、我國の海外發展を抑制 Check しつゝあるものゝ如し

皇國の興廢を卜すべき、倫理思想の幼稚なる、經濟思想の井蛙的なる、一として鎖國の賜ならざるはなく、夙に鎖國思想の一轉を期するは、識者の正に勗むべき急務には非ざる乎

海外の事情に幼稚なること、同胞の如きはあらざるべし、國家、既に日本の日本より變じ、世界の日本

と化したるの今日、世界の事情に明なる否とは、直に國家の盛衰に關すること言を待たず、而して海外の事情に精通せんと欲せば、宜しく榮螺的生活を脱し、斷乎として排外思想を打破すべし、而して排外思想の打破は、國民の外遊に如かず

敢て言はんことす、苟も資力 Means を有するものは、一日も早く一度たりとも、足を海外に運べし、可愛子には旅せしめよ、世の父母よ、多少にても國家の將來を慮る士よ、愚にもつかざる杞憂をすて、自ら出でざるまでも、己れの子弟をして廣く海外に旅行せしめ

よ、知らずや、都をば霞と共に立ちしかど、秋風ぞ吹く白河の關、能因法師の詠ぜし、昔の江戸長崎よりも、今の倫敦、紐育の、遙に近づけることを

五十年前、象山、松陰の海外渡航を送りて

之子有靈骨 久厭蹙蹙群 奮衣萬里道

心事未語人 雖則未語人 忖度或有因

送行出郭門 孤鶴橫秋旻 環海何茫茫

五州自爲隣 周流究形勢 一見超百聞

智者貴投機 歸來須及辰 不立非常功

身後誰能賓

ミ、セント アウガスチンは、「世界は一大書冊なり、
而して家を出でざる者は、僅にその一頁を讀めるのみ」
と云へり

明治天皇の御製に

よきをこり悪しきを捨て、外國に

劣らぬ國となすよしもかな

別荘と旅行

變化は人生の鹽なり、平坦なる道路を歩む馬は、
山阪を行く馬よりも、速かに斃る、何となれば 平坦
なる道路は、山阪よりも、歩行に容易なりとはいへど
も、變化なければなり、馬、尙然り、況んや人間に於
てをや

山間に住めるもの、海濱に別荘を構へ、海岸に居
るもの、山谷に別宅を設く、大都會の中央に、本宅を
有するもの、幽邃閑雅の地に別業を造り、大陸に邸宅
を有するもの、山水明媚の島國に別墅を營む、蓋し人

情おのづかの自ら然らしむるところ乎

152

抑も別荘の價値は、その位置、空氣、建築等に於て、本宅と全く異なる所にあり、是れ別荘の生命にして、この本領ほんりやうを没却ぼつきゃくせる別荘は、別荘としての價値更にあることなし、而して別荘中最も進歩したるものを、快走はやつた船ふねとす、自由に世界の到る處に廻遊くわいゆうし得、その世界的にして、趣味と變化へんかとに富める、恐らくは之に過ぐるものなかるべし

試に、邦國の別荘を有する人を見よ、果して別荘の意味を解せるもの幾何ありや、知れりや、同じ都會の内に住宅と別荘とを兼ね有するもの、同じ海濱に本宅と別邸べつていとを造れるもの、果して別荘の何の意なるやを

帝國の如き、四面環海くわんかいの國土にありては、山といへば水、水といへば山にして、殆んど變化の見るべきものなければ、必ずしも別荘の要なく、況んや「貧乏したけりや別荘持つに限る」の語さへあり、餘りに富裕ゆたかならざるものに於てをや

敢て別荘を有あたんと欲せば、何すれそ夫れ 海外に之を持たざる、別荘を好む紳士、奮發一番しては如

153

何に、若し夫れ、烟霞の痼疾ある者は、なせ旅行を、
別荘よりも更に變化多き、旅行を

京都の蛙と大阪の蛙

「むかし、京にすむ蛙が、かねて大阪を見物せんと望んで居りましたが、此春おもひ立つて、難波名所見物と出かけ、のさのさと這ひまはり、西の岡向の明

神から、西街道を山崎へ出で、天王山へのぼりかゝりました、又大阪にも、都見物せんとおもひ立つた蛙が有つて、これも西街道、瀬川、あくた川、高槻、山崎と出かけ、天王山へのぼりかゝり、山の巔で、兩方が出合ひました、ナニが互に仲間同志なれば、めんめんの志をはなし、扱兩方がいふ様は、此やうにくるしい目をして、漸々こまだ中程ぢや、是から互に京大阪へゆきなば、足も腰もたまるまい、爰が名におふ天王山の巔、京も大阪も一面に見わたす所ぢや、ナント互に足つまだて、脊のびして見物したら、足のいたさが助

からうと、相互に相談きはめて、兩方がたちあがり、足つまだて、向ふをきつと見わたして、京の蛙が申しまするは、音にきこえた難波名所も、見れば京にかはりない、術ない目をしてゆかうより、是からすぐに歸らうといふ、大阪の蛙も目をはちはちして、嘲笑ふていふやう、花の都と音には聞けど、大阪にすこしもちがはぬ、さらば我等もかへるべしと、雙方互に色代して、又のさのさと這ふて歸りました」 道話

田舎に在りて都會を視んとし、内地に在りて海外を察せんと欲するもの、よろしく味ふて可なり、語に

も、井蛙大海を知らずと、島國に在りて、我もの顔に、大陸を論ずると、針の穴より天を闕くと、擇ぶ所何れぞ、憂國の士、希くば、社稷をおもふ餘り、或は偏して、手はつけぎ、目は上につく蛙たらざらんことを

日米の國交

輓近、我國の上下を通じて、盛に流行せる輿論の

一を、正に日米の問題とす、顔を赤らめ、額に青筋を立て、口角泡を飛ばし、否米國の排日、否日米の戦争と、甲論乙駁、臆面もなく憂國の士を氣取る才子益々多く、國家の爲に、全然資らざる感情的囁語を、發作的に、言筆になせるもの、何すれそ多き、俗に所謂彌次馬連までが、空々寂々、根據もなく、定見もなく、而して己れの分限をも度外視して、苟も事國家の休戚に關する重要問題を、輕々に論じ、蛙鳴蟬聲、前後の分別もなく、俗に所謂人氣に投じて附和雷同す、如斯は果して國家の慶事にや、國家の爲悦ぶべき現象にや

彼等果して知れりとするや、彼を誹りて、その禍の却て我に到るここあるを、彼等果して知れりとするや、苟且にも日米の國交に瑕疵を生ぜんか、仍て以て痛癢を感じるは、何れの國なるやを、彼等果して研究せりとするや、彼我が歴史的關係の一頁を、彼等果して目撃せしここありや、彼我貿易上の數字を

而して米國の國體、米國民の祖先の人種別、歐洲諸國と米國とを結付くる、宗教資本血族の三綁束、さては米國の文明、及び中堅を爲す國民の倫理思想、何れの一として、嘗て之を夢にだも見たるここありや

己れの見聞せざる所を、恰かも知悉せるかの如く、
早合點して、不謹慎にも、筆と口とに任せて、國家の
消長を議するが如きは、啻に友邦に對して、信義を缺
く而已ならず、我國の爲、忽かせにすべからざる、所
謂獅子身中の虫なり、中堅を爲す我國民思想よ、希く
ば知らぬ佛、蛇に怖ぢざる盲をして、徒に之を惑はし
め、雀おごして鶴失ふなからんことを、句に
根をしめて風にまかする柳かな

品性の揭示場

仰ぎて物言ふ人あり、俯して物言ふ人あり、右向
きて物言ふ人あり、左向きて物言ふ人あり、世、斯の
如き人を稱して、言中に自信なき人といふ

元より、自信なき爲にする場合もあらん、或はな
くて七癖、あつて四十八癖、單に對話中の癖なるやも
未だ測り難し、然れども常識を以て考へんか、茲に己
れの意志を、人の腦裡に徹底せしめんと欲し、態々顔

を他に背くべき要、何處にかある

抑も顔は、言行と共に、忌憚なく其人の人格を描き出す、品性の揭示場なり、この揭示場を他方に、己れの欲する所を云はんことす、頗る御念の入りたる對話法には非ずや

口は虚言を吐き得れども、顔は然らず、故に世の人、人の云ふ所の眞贋を判断せんこと欲せば、其口にて言ふ所と、顔にて言ふ所と、正に符合せりや否やを見るに如かず

論語に、思ひ裡にあれば、色外にあらはる、こあ

り、請ふ勿忘、口言はんこと欲する所を、品性の揭示場即ち顔も亦言ふことを

此世の宿帳

天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客と、古人もいへり、豊臣秀吉は、京都阿彌陀ヶ峯の頂上に「豊國大明神」こ此世の宿帳を附け、かへらじと、かねて思

へば、梓弓あづさゆみ、なき數に入る名をぞ留むる、菅原道眞は、
 津々浦々に「天滿天神」を宿帳を附く、湊川神社にあ
 る「嗚呼忠臣楠子之墓」は楠木正成の宿帳にして、「沖
 の暗いのに白帆が見える、あれは紀の國蜜柑船」は
 豪膽あうたん、紀の國屋文左衛門が宿帳乎、梁川星巖の詩に

豹死留皮豈偶然へうはし、てかはをとまむあにやうぜんならんや

湊川遺跡水連みなとがほのかせきみづてんにつらなる

人生有限名無盡じんせい、かぎりありな、つくるなし

楠氏精忠萬古傳なんしのせい、ちゆうばんこにつたふ

此世てふ宿屋に、永々逗留して、茶代をおかざる、
 鐵面皮漢てつめんぴかんあり、甚しきは、合客あひきゃくに迷惑をかけ、宿賃を
 も支拂はずして、彼の世に逃竄たうざんする卑怯者ひきやくものすらあり、

彼等は死して、穀こくを留むる珊瑚さんごの微生蟲せいせいちゆうにだも及ばず

或は、此世の宿屋に逗留して、爵位勳等族籍を、
 麗々れいれいしくも書き立て乍ら、己が姓名を記さずして、彼
 の世へ旅立つ周章者あわてものあり、片腹痛かたはらき限りにこそ

商に工に農に、或は宗教に、文學に、教育に、己
 が天職を全うし、忌憚きたんなく自己を發揮はつぱいして、永とこしなへに、
 不朽ふくしうの生命を保つことは、蓋し萬物の靈長たる人と生
 れし所以には非ざる乎

TEACH me your mood, O patient stars!

Who climb each night the ancient sky,

Leaving on space no shade, no scars,

No trace of age, no fear to die.

R. W. EMERSON.

晴天三日間

「紺屋の明後日、鍛冶屋の今度」こは、邦人の契約思想の、如何に幼稚なるかを、證し得て餘す所なし、

始めより不可能なるを知り乍ら、無遠慮にも之を諾ひ、約束の期日に至りて、化けの皮を脱ぐ、契約にかゝる愛嬌の必要あらんや

ある邦人は、得心の上、契約書に署名捺印し乍ら、後日に至り、己れの手許の都合によりて、之を左右せんと欲し、相手方が、契約書によりて其履行を強ふるや、恬然として曰く、「契約書は書き物にして、物言ふべき物に非ず」と、「契約は神聖にして犯すべからず」と云ふ、米國の上下を通じて、嚴密に行はるゝそれと、比較して、面白き對照に非ずや

米國にては、紺屋の明後日こ、云はんど欲する場
合には、「晴天三日間」こ云ふ、豫め不可抗力ある場合
を想像して、必ず履行し得るやう、總べての契約をな
すを常とす、凡そ人にして、契約を履行し得ざる恥に
過ぎたる恥あらんや

COWARD. と陰口

“You coward!” (汝 卑怯者奴) 試みにこの語を、

米國の三歳の童子に向つて放ち見よ、彼はその他の總
べての侮辱よりも、更に苦痛を感じん

“Honorable” (敬ふべき) の語は、マーク アント

ニーが、ジュリアス シーザーの死骸を携へて、ロ
ーマ市民の面前に現はれ、ブルータスの不仁不義の刃
にて斃れたる、シーザーを痛み弔ふ時に、ブルータス
に向つて三度用ひたる敬語にして、泰西に於ける無上
の敬語なり

蓋し Honorable 〆 Coward 〆は、兩極端を意味するも

のか、"You coward!" を大人に用ふる場合は、主として陰にて人を中傷する人に對しての場合、人の一寸我一尺、陰口を叩く者は、自ら遁匿すべき孔を掘るもの、余は言はんことす

一概に我を賞むる者は、未だ我の全部を知らず陰にて我を誹る者は、未だ全然我を知らず

の面前にて我を責むる者は、我の常に求めて止まざる恩人なり

而して我未だその恩人に會することの、甚だ尠きを怨む

と、道歌に

涼しけりや涼しすぎると人の口

戸はたてられぬ夏の夕暮

人を呪へば穴二つ、陰口と、聾者を誹ると、闇に

鐵砲を放つと、其卑怯何れか、芭蕉の句に

物いへば唇寒し秋の風

十九年間一千萬圓

十九年間一千萬圓

往來の人の、走れる米國より、歸省する毎に、際立ちて見ゆる所のものは、邦人の歩行なり、雙手を懐に、左眊右顧、漫然と、歩むこともなく行く人の多き一事が萬事、總べて其範を脱せず、紐育中央停車場が、四年前後にして、四億圓の工事を竣れるに對して、東京にては千二三百萬圓の中央停車場を建築するに、優に十九箇年の長年月を費したるに見るも、その如何に悠々たるかを、察するに足らずや

汽車の速度の如きも、彼の五十哩に對し、我にて

は、速きものも漸く其半に過ぎず、而して更に、邦人の落付たるは金錢の支拂歟

預金の引出預入の爲に銀行に行きても、米國のそれよりも尠くとも數倍の時間を要す、故に我國の銀行は待てる人もて繁昌せり

米國にては、申込後數分を出でずして、架設さるる電話も、我國にありては、申込み後、數年にして漸くに架かる、故に短命の人は、此世にて申込みたる電話を、彼の世にて使用せざるべからず